

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(九)

植 木 久 行

●一九九番 白居易「白羽扇」「盛夏不銷雪、終年無盡風。
引秋生手裏、藏月入懷中」

○大和九年(八三五)、作者六四歳、東都洛陽での作、太子賓客分司在任(花・朱)。本詩は五言排律であり、上掲の部分は二組の對句。金澤文庫舊藏鎌倉初期鈔本(豊原奉重校訂本)『白氏後集』卷第六十五(太子賓客 晉陽縣開國男 賜紫金魚袋 白居易)に收め、文字に異同はない。太子賓客は東宮府(皇太子の役所の官で、「侍從・規諫し、禮儀を贊相(わきから助ける)として先後するを掌る」(『大唐六典』卷26)正三品官。白居易にとっては再任の官であった。中唐以降の洛陽は、天子の訪れもなく、政治的地位を失い、すでに名利とはほとんど無縁の退老の地、庭園の美しい閑靜な文化都市と化して(2)いた。従って「分司東都(洛陽駐在)」は、激しい政争の一時的な敗

退者で再起を期する者たちや、劇務を望まない高齢な官僚たちの就く閑職であった。埋田重夫「白居易の閑適詩」詩人に復原力を與えるもの⁽³⁾によれば、白居易は分司東都の閑職にあつたわが身の幸福をくり返し表明し、その理由として、①官品(三品)が貴い、②俸給(七八萬錢)が良い、③給料支給は毎月ごとで「虚月」がない、④責任が軽い、⑤閑暇が多い、⑥束縛が少ない、⑦天子への朝謁の義務がない、⑧病弱な者が養生するのに最も適している、⑨東都洛陽は黄塵少なく名勝も多い、⑩長安政界を隱退した「君子」(知識人)が多く住んでいる、などを指摘する。本詩もそうした環境の中で作られた閑適詩の一首であり、「シロキハウチハ」(『名物六帖』器財箋五)を歌う詠物詩。

〔白羽扇〕 鳥の白い羽で作った軽い團扇(左右對稱の合歡

扇)。これは、竹や草を編んで作った實用扇、嶺南地方(廣東・廣西)特産の檳榔樹の葉を用いた蒲葵扇、あるいはまた、絹製の羅扇・紈扇とは異なり、主な用途に二つある。①將軍が戦いとき指揮に用いるもの、いかえれば總大將の指揮權のシンボルであり、諸葛亮の白羽扇は特に有名。②涼を取るために用いる團扇の一種で、皎潔・高尚なものとして脱俗的な隱士の風貌に似あう。ここでは、もちろん②のイメージである。この點は、白居易みずから、仕と隱の雙方を満足させる分司東都の閑職に在任するわが身を、いわゆる「吏隱」の生活態度をさらに一步進めた「中隱」(大隱と小隱の間)として肯定する考え方とも通底して興味深い。李白「夏日の山中」詩に、「白羽扇を揺かすに懶く、青林の中に裸袒す」とあり、孟浩然「隱者の」白雲先生王廻訪はる」詩に、「手に白羽の扇を持ち、脚に青芒の履を歩く」とある。本詩と同年の白詩「早熱二首」其二(卷30、後集卷4)の「扇は白き鶴の翅を揺かす」に據れば、本詩の白羽扇も鶴の羽を用いたものか。傳同欽「古代的扇子」によれば、六朝前期、上流階級の閒で用いられた白い羽毛扇の形態は單翅式(圓形ではなく、鳥の片方の翅の形。偏扇〔注13〕の一種)であったらしいが、本詩の白羽扇は、作者みずから冒頭に「素は是れ自然(天然)の色

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)

にして、圓かなるは裁製の功に因る」と歌うように、圓形に裁斷・作成されたものであった。劉宋の謝惠連「白羽扇讚」には、「惟茲白羽、體此皎潔。涼齊清風、素同水雪。其儀可貴、是用玩悅。揮之襟袖、以禦炎熱」という。ちなみに、簡野道明「白詩新釋」は、「颯として松の籟を起すが如く、飄として鶴の空に翻るに似たり」を含めてこう評する、「此の六句を誦すれば、三伏の日も頓に炎熱を忘るるに足る、詠物の巧凡手の及ぶ所ではない」と。

○〔盛夏〕眞夏。皆川淇園『實字解』時令部・夏の條に、「總じて夏をば、炎夏・長夏・朱夏・盛夏・九夏・陽夏・暑夏・永夏など稱す」とあるが、唐の鄭餘慶撰『大唐新定吉凶書儀』年叙凡例第一に、「五月仲夏叙云、中夏・仲夏・盛夏・炎夏……」というように、やはりまず舊曆五月を念頭に置くべきであろう。初唐の許敬宗撰『朋友書儀』にも、「五月仲夏、……當思盛夏、暑熱異常」とある。

○〔不銷雪〕銷は「消」にも作る(『校異和漢朗詠集』)が、同意。團扇の清らかな白さを雪にたとえる表現は、もちろん、「團扇」の短章(『詩品』上品・班婕妤の條)として名高い前漢の班婕妤佳作「怨歌行」(『文選』卷27)の、「新たに齊の紈素(白絹)を裂けば、皎潔にして霜雪の如し」を踏まえる。前

掲の謝惠連「白羽扇の讚」にも、「素しろきこと氷雪に同じ」という。

○〔終年〕一年中。白詩の用例は、このほか「適意二首」其一の「終日一蔬食、終年一布裘」(卷6)など五例ある(『索引』)。

○〔無盡風〕「扇ノ風ハ、イツモツカヘハ有ル故ニ、ツクル事ナキ風ト云也」(國會圖書館本『和漢朗詠注』「伊藤正義・黒田彰編著『和漢朗詠集古注釋集成』第二卷上所收)」。班婕妤「怨歌行」に、「君が懷袖に出入して、動搖して(動かすたびに)微風發す」とある。謝惠連「白羽扇の讚」の「涼しきこと清風に齊し」、梁の武帝「團扇歌」の「清風 動かすに任せて生ず」なども類例。

○〔引秋〕秋は涼とほぼ同意。秋の涼しさ。白居易「和韓侍郎苦雨」詩(卷19)に、「閨留窗不曉、涼引簾先秋」とある。

○〔生手裏〕『六注』に「生ハ、來ノ義也」とするが、生は文字どおり發生の意でよい。「秋を引きて手の裏に生ぜしむ」。梁の何遜の詩(「與虞記室諸人詠扇」)に、「風を揺かして素手に入る」という。

○〔藏月〕團扇を圓まどかな月(團月・圓月)に見立てる表現も、班婕妤「怨歌行」の「裁ちて合歡の扇(柄がまん中にある

左右對稱型の圓形のうちわ)と爲せば、團團(まるいさま)として明月に似たり」以來の常套表現。江淹「雜體詩三十首」(『文選』卷31)其三「班婕妤(詠扇)」の條にも「紈扇は圓月の如し」とあり、梁の武帝「團扇歌」にも「手中の白團扇、淨かなること秋の團月の如し」という。ちなみに、圓形のうちわは、漢代に起こった新型とされ、舊來の「偏扇」⁽¹³⁾とは異なるという。

○〔入懷中〕「懷中」は、小島憲之『國風暗黒時代の文學中(中)』⁽¹⁴⁾によれば、六朝以來、非詩語(散文用語)であって、韻文語(詩語)としてはむしろ「懷袖」であるとし、前掲の「怨歌行」「出入君懷袖、……」などの用例をあげる。白詩の用例は、さらに「小歳日、喜談氏外孫女孩滿月」(卷34、後集卷15)の、「懷中、有可抱、何必是男兒」の一例のみである(『索引』)。

〔折扇〕金子・江見「新釋」は、「製は開閉自在なるが故に、明月の形と見えし扇も、忽ちをさめて、懷中に入るべしといへり」と解釋し、大曾根譯にも「明月の形と見えた扇もたたみおさめると忽ち懷中に入れてしまふ」とあって、いずれも折り疊みできる扇子の類を念頭に置く解釋である。しかし團扇の大きさはさまざまであり、本句は單に「懷ふところに收むれば、滿月を抱いたやうである」(佐久節譯)というにすぎな

い。というのは、開閉自在で折り畳みできる扇子、いわゆる折扇・摺疊扇⁽¹⁵⁾は、九世紀ごろ日本で發明され、北宋以降、日本の重要な贈物・輸出品の一つになり、扇面に描かれた精妙・華麗な大和繪とともに廣く好評を博した。朝鮮ではただちにこの日本扇を精巧に模造して中國への贈物として用いたところから、折扇は朝鮮で發明されたとする誤解が、一時中國内にも生じたほどである。⁽¹⁶⁾森克己『日宋文化交流の諸問題』⁽¹⁷⁾「一四 大陸文化と日本扇」の條には、

日本扇はシナでは倭扇・聚頭扇・摺扇・摺疊扇・畫摺扇・撒扇等と呼ばれ、大陸の普通の團扇とは區別されていた。すでに十一世紀の後半頃より宋都汴京の相國寺境内の有名な市場の店頭を飾ったのである。また、高麗では、宣和五年（一一二二）に高麗に使用した宋使徐兢が高麗において日本扇（杉扇・畫摺扇）を見たことを『宣和奉使高麗圖經』（卷29）に記しているのである。従って、これ等の事實より推して、わが「日本扇」が平安末期には宋・高麗に廣く輸出されておったことがわかるのである。

と指摘する。ちなみに、北宋の蘇轍（一〇三九—一一二二）「楊主簿の日本扇」詩に、「扇從日本來、風非日本風。……但執日本扇、風來自無窮」と歌われるものは、折扇を指すと考

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(9) (植木)

えてよい。明中期の陸深『春雨堂隨筆』には、折扇の傳來經過を、

今世所用摺疊扇、亦名聚頭扇。吾鄉張東海先生、以爲貢於東夷（日本や朝鮮）。永樂間（十五世紀前期）、始盛行於中國。予見南宋以來詩詞、咏聚扇者頗多。予收得楊妹子所寫絹扇面、摺痕（折り疊んだ跡）尙存。東坡（蘇軾）⁽²⁰⁾謂高麗白松扇、展之廣尺餘、合之止兩指許。正今摺扇、蓋自北宋已有之。

と述べる。つまり、折扇は北宋時代、日本や朝鮮から傳來⁽²¹⁾し、元代になっても珍しく、その盛行は明代⁽²²⁾であった。

ところで、唐代すでに折扇の傳來を推測する説もある。明の方以智は『通雅』卷三三、器用・古器、摺扇の條に「『唐韻』有摺扇、殆亦折扇之萌芽乎」とあり、同『物理小識』卷八、器用類、宮扇類の條に、「智按、孫愔『韻』注摺扇、則唐人已有矣」という。近年の傅同欽「古代的扇子」も、この説を踏まえて、日本・朝鮮との交流が盛んな唐代の初期、折扇はすでに中國に傳來したが、宮中内に留め置かれて使用され、それで摺扇を宮扇類のなかに入れるのだ、と説明する。ただこの説は、摺扇そのものの形態が未詳であり、その存在を傍證する資料もなく、現時点ではやはり「定論にはなりか

ねる」(楊珍「扇—中國生まれの團扇と日本でできた扇子」⁽²⁴⁾) ようである。假りに唐代初期すでに傳來していたとしても、それは宮中に留め用いられて、民間には流布していない。本詩は、明らかに漢代以來の傳統的な團扇を詠じており、この白羽扇を折扇のごとく解釋する説は誤りであるといえよう。

●二〇四番 白居易「立秋の日、樂遊園に登る」⁽²⁵⁾「蕭颯涼風與衰鬢、誰教計會一時秋」

○長慶元年(八二二)、作者五十歳、都長安での作(花・朱・羅、禮部主客郎中・知制誥⁽²⁶⁾在任。主客郎中は、「二王の後(北周・隋王室の子孫)及び諸蕃(主に外國)朝聘の事を掌る」從五品上の官(『大唐六典』卷四)。また知制誥とは、他の官職に就きながら、「文士の極任、朝廷の盛選」たる中書舍人の掌る制誥の起草を補佐して執筆する者をいう。礪波護『唐代政治社會史研究』⁽²⁶⁾によれば、知制誥は「中書舍人の見習い役」であり、「知制誥の肩書きを帯びる者の殆んどが、尙書六部の郎中か員外郎であった」(二〇五頁)。長慶元年の「立秋」⁽²⁷⁾は、七月一日。唐代、内外の百官は一日休暇となった。本詩は、この休日を利用しての散策であろう。季節の移行期が、詩人の感興をかきたてる新しい詩材として登場してきたことを物

語る。白詩の「立秋」(4例)は、すべて詩題中に見える。

〔樂遊園〕長安城内で最も地勢が高くて眺望に富む、標高四五〇〜四六〇メートルの綠濃き高燥の臺地であり、樂遊原ともいう。前漢の宣帝(前七三—前四九年在位)を祀る「樂遊廟」址のあった昇平坊の東北隅を中核として、その周邊の坊(新昌・昇道・宣平)の一部をも廣く含めた呼稱。川口注に「唐都長安の西方」とあるのは東南部の誤り。玄奘ゆかりの大慈恩寺(晋昌坊の東半分)や、新進士たちの華やかな探花宴が催された南郷の杏園(通善坊)、天子の離宮「芙蓉園」などとも、廣大・清澄な曲江池(周七里、占地三十頃)を中心とする都城内の有名な景勝地區を形成した。ただ平素の樂遊園付近は、住民が少なく、野草や樹木の生い茂る荒地であり、とくに漢代以來の墳墓が多く残存して、狐や兔の出沒する廢墟であった。詳しくは、拙稿「唐都長安樂遊原詩考—樂遊原の位置とそのイメージ」⁽³⁰⁾や、拙著『唐詩の風土』二八頁以下参照。

夏承燾の「據『白氏長慶集』考唐代長安曲江池」⁽³¹⁾によれば、起句に詠まれる「曲江の頭り」とは、昇平坊の南の青龍・晋昌・修政などの諸坊にあり、樂天はそこから東北に馬を進めて、修行・昇平の二坊を通過して新昌坊の自宅⁽³²⁾に歸ったの

だ、とする。ほぼ穩當な推測であろう。多数の人々のつどう樂遊原上の野宴は、安史の亂後、急速に影をひそめ、さまざまな憂いをいだいて、ただひとり車馬を驅って登る人たちが急増する。この詩もその一例といえよう。

○「蕭颯」ものさびしくうらぶれたさま（雙聲）。単に「秋ノ風ノス、シキ貞」〔抄注〕ではない。朱起鳳『辭通』卷二一、入聲・四質によれば、蕭颯は蕭瑟・蕭索・颯瑟・颯屑などと通じあう、同一の聯綿詞（二音節が連なって一つの意味をなし、分割できない言葉）の異なる書寫形式にすぎず、いずれも「蕭條寂寥之意」であるとし、その按語にいう、「颯・瑟は同音の通段、索の字は、古へ亦た瑟と讀む。……蕭の字颯に作るは、猶ほ瑟の字屑に作るがごときなり。並びに方音の變」と。

本詩の「蕭颯」は、單に涼風だけでなく、衰鬢をも形容する言葉として捉えるべきであらう（西村富美子『白樂天』）。従つて「蕭颯たり 涼風と衰鬢と」（佐久注本、西村『白樂天』など）のごとく讀むこともできよう。白詩中の蕭颯は、本例を含めて九回。秋風にゆれる葉ずれのさびしい擬聲語としては、「曲江 秋に感ず二首」（其二）に、「蕭颯たり 西風の樹」があり（卷11）、うすく白くなった髪や鬢を形容した用例として

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(九)（植木）

は、「池上閑詠」詩（卷31、後集卷12）に「白鬢蕭颯たり 管弦の秋」がある。「病眼昏似夜、衰鬢颯如秋」（答卜者）卷6も、後者の用法を考える参考にならう。

○「涼風」秋風を呼ぶ言葉の一つ（『白氏六帖事類集』卷一、秋第三十）。もちろん、『禮記』月令篇、孟秋（七月）の條の、「涼風至り、白露下り、寒蟬鳴く」を踏まえ、白詩の題にも「立秋の夕べ、涼風忽ち至り、炎暑稍や消ゆ、……」（卷36、後集卷4）と見える。明の璩崑玉編『古今類書纂要』卷一には、「西南の風なり。立秋に涼風至る」と述べ、元の吳澄『月令七十二候集解』は、「西方淒清の風」をいうとする。馮秀藻・歐陽海『廿四節氣』⁽³³⁾によれば、立秋の第一候「涼風至る」は、黄河中下流域、とくに西安の風向きの變化——新曆八月、偏南風の頻度が減少して、偏北風のそれがしだいに増大すること——と一致する、と。「涼風」は白詩の愛用語（本例を含めて四三回）。その一例、「涼風從西至、草木日夜衰」（秋懷）卷9。

○「衰鬢」抜け落ちて薄くなり、めっきり白くなった髪や鬢の毛。『和漢朗詠集假名注』⁽³⁴⁾に「白鬢也」、『六注』に「白髮也」とし、高木正一『白居易』下に「色つやあせた髪の色」と注する。前掲の白詩「卜者に答ふ」詩に、「衰鬢は颯として

中國詩文論叢 第十五集

秋の如し」と歌う。作者が當時すでに白髪であったことは、同じ長慶元年の作、「鬢髪は莖莖（一本一本）白し」（『中書連直』）卷19、「白髪 平頭（ちようど）五十の人」（『登龍尾道南望』）卷19）などによっても推測できる。

五十歳を迎えた白居易は、忍びよる老いの氣配を痛感し、肉體の衰えをにわかを意識しはじめて、「秋來 轉た覺ゆ此の身の衰ふるを、晨に起き 階に臨んで 盪漱する時」（『新秋早起、有懷元少尹』卷19）とも歌う（同じ長慶元年の作）。しかも當時の作者は、穆宗朝の廷臣としての深い失望感から、江州左遷以降の六年間の不遇を慨嘆し、あまりにも遅すぎた榮達（榮遇と年齢との齟齬）を深く悲しんだ。本詩の暗く沈んだ調べも、この「晚遇」の悲嘆を背景の一つにしよう。詳しくは、芳村弘道「白居易の杭州刺史轉出」⁽³⁵⁾ 参照。

ちなみに、川口本の底本（傳藤原行成筆葉裝本）などには、「衰鬢」を「悴鬢」に作る。この改變が、單に日本的語感（やつれた髪の毛）によるものでないとしたら、音調律（平仄）の不和に對する（じつは誤った）認識にもとづくのかも知れない。というのは、『集註』に「此の句、聲を調へず。謂はゆる風は他、衰は平。『文集』の詩の體にこの例多きなり」といい、『抄注』もほぼ同じである。七言絶句の轉句「蕭颯涼

風與衰鬢」の節奏點（第二・四・六字）の平仄を調べると、第六字めは仄聲であるべきなのに、置かれた衰字は平聲であり、いわゆる「二六對」の規則を守らない。「聲を調へず」の論評が生まれたゆえんである。そして「聲を調へる」ために、類義語の「悴」（仄聲）字が選びとられたのであろうか。

しかし白詩には「悴鬢」の用例は全くなく、本例を含めた五例の衰鬢についても、中國側のテキストでは「悴鬢」の異文はない。そもそも「悴容」「悴顔」などというが、「悴鬢」の用例は現在のところ見たことがない。いま『私注』『六注』『千載佳句』などに従って底本の悴を衰に訂す。

ところで蕭颯の句の音調律は、王力のいわゆる「子類特殊形式」（『漢語詩律學』一〇〇頁）、中井竹山の「挾平格」（『詩律』卷一）、三浦梅園の「夾平」（『詩轍』卷二）にあたる、平仄上の特殊形式に屬している。この場合、韻を踏まない句の下三字の平仄「○○●」は「○●●」に互換できるものとして見なされ、じつは詩律にかなうのである。従って「悴」になおす必要性は全くない。白居易の「百花亭晚望、夜歸」（卷16、七律）の頷聯「日色悠揚映山盡、雨聲蕭颯渡江來」、「西湖留別」（卷23、後集卷5）の尾聯「處處迴頭盡堪戀、就中難別是湖邊」なども、同じ「子類特殊形式」である。

○〔教〕 使(上聲)・令(平聲)と同じ使役の用法(平聲)。皆川淇園『助字詳解』に、「詩家并に俗語に多く此字を使の字の如くに用ゆ」といい、伊藤東涯『操觚字訣』卷二に、「教ヲ、シムトヨムコト、教命シテ、ナサシムルヨリ、語辭ニ用ユ、後世俗語ニ多シ」という。

○〔計會〕 明の馬元調本は「同會」に作る。この異同に關して、わが穴戸方鼎(新選)『白詩集』(文化十四年「二八一七」刊)卷一の頭注には、「同會、或作計會、恐非」というが、清の盧文弨『白氏長慶集校正』(『群書拾補』所收)が影宋抄本に據って馬本の「同會」を「計會」に正す説に従うべきである。朱『箋校』も馬本の訛とする。

計會は唐代に常用された言葉であり、白詩には既出の五番(『府西池』)と本例の二回使用される。ここで従來の主な解釋例をあげると、以下のごとくになる。大東文化大學中國語大辭典編纂室編『中國語大辭典』⁽³⁹⁾上には動詞・白話と認定し、①相談する、計畫する、②清算する、の二意をあげ、項楚『敦煌變文選注』⁽⁴⁰⁾「伍子胥變文」の注29にも、「計會」爲計算、引申爲商議」と述べ、前掲①の意味を指摘する。また鹽見邦彦『唐詩口語の研究』⁽⁴¹⁾は白詩の二例以外に、劉禹錫・章孝標・方干の各一例をあげ、「しめくくる、區切りをつける」

意の口語(前掲②の意味に近い)と見なすが、少くとも白詩の場合、穩當ではあるまい。なお松尾良樹「平安朝漢文學と唐代口語」⁽⁴³⁾には、「計會」を「はかる、たくらむ」と譯す。

ちなみに、圓仁の『入唐求法巡禮行記』には五例用いられ、小野勝年『入唐求法巡禮行記の研究』第四卷には、「とりはからう、相談すること」(三三三頁)とし、「會もまたはからうの義」(一四二頁)とする。他方、白化文・李鼎霞・許德楠『入唐求法巡禮行記校註』⁽⁴⁵⁾は、「處理、照顧、商量、研究」などの意味があるとし(四三三頁)、「唐人の常套語で、『問題を研究する』の意がある」とも指摘する(四六五頁)。これらの諸説を参照すれば、白詩の用例は「〔出納を〕計算する」原義をかすかに残しつつも、より多く「とりはからう」「處理する」「計畫する」「計をめぐらす」方向で解釋すべきである⁽⁴⁶⁾。川口注「ちょうどびつたりにアレンジする」は、この意味で適譯である。こうした解釋は、すでに『六注』に「ハカライ合テ、『和漢朗詠集假名注』に「相ハカライテ」などとして見える(ただし、「合テ」「相」は不要)⁽⁴⁷⁾。

ところで王瑛『唐宋筆記語辭匯釋』⁽⁴⁸⁾には、「計會は、ほぼ『知會』(知らせる)と同じく、(相手に)知らせる、通報する意味で、通常の『そろばんをはしく(盤算)、あれこれ考える

「思慮」の意味ではない。動詞」と述べた後、『太平廣記』卷一五六、崔潔の條（『逸史』）の、

（潔）曰、「何處去得？」。左右曰、「裴令公亭子甚近」。乃先遣人計會。

などの用例をあげる。そして白詩（五番「府西池」⁽⁴⁹⁾）の「今日不知誰計會、春風春水一時來」も「知會」「通知」の意味であるとするが、従いがたい。上掲の『逸史』の用例も、周振甫主編『白話太平廣記』⁽⁵¹⁾の譯文（二八二頁）に、「于是就先派人去協商」とあるごとく、前述の一般的な意味で充分通じるのである。ちなみに、『逸史』は晩唐の盧肇^{ろせう}の撰である。

○〔一時〕 同時に、一緒に、一度に。五・一二七番に前出。

○〔秋〕 萬物の凋落する季節としての秋と、衰老する人生（肉體）の晩年（白髮の老境）としての秋とをあわせて表現する用言（動詞的用法）。李白「古風五十九首」（其十二）に、「春容 我を捨てて去り、秋鬢 已に衰改す」とあり、清の王琦は「春容」「秋鬢」をそれぞれ、「少年の容を謂ふ」「衰暮時の髪を謂ふ」と注する。白詩の「照水烟波白、照人肌髮秋」（城上對月、期友人不至）詩、卷10）、「催老莫嫌孫稚長、加年須喜鬢毛秋」（同夢得和思黯見贈）詩、卷34、後集卷15）の「秋」も、わかかわかしい色つやと張りを失って、衰殘・老衰する

意。ちなみに、秋鬢の秋には、衰老のほかに、白（五行思想における秋の色）の意味も加わっているようである。

〔注〕

- (1) 『金澤文庫本 白氏文集四』（勉誠社、一九八四年）に據る。
- (2) 拙著『唐詩の風土』八〇頁以下や、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」（『白居易研究講座第一卷、白居易の文學と人生Ⅰ』勉誠社、一九九三年所収）など参照。
- (3) 王吉林「晚唐洛陽的分司生涯」（淡江大學中文系編『晚唐的社會與文化』臺灣學生書局、一九九〇年所収）参照。
- (4) 『白居易研究講座第二卷、白居易の文學と人生Ⅱ』（勉誠社、一九九三年）所収。
- (5) 『白氏六帖事類集』卷四、扇第二十七、白羽扇の條に、「裴啓語林曰、『諸葛武侯持白羽扇、指麾三軍』」とある。周一良『魏晉南北朝史札記』（中華書局、一九八五年）『晉書』札記のなかの「白羽扇」の條参照。
- (6) 吉川忠夫「白居易における仕と隱」（注2に引く『白居易研究講座第一卷』所収）参照。
- (7) 徐鵬『孟浩然集校注』（人民文學出版社、一九八九年）、李景白『孟浩然詩集校注』（巴蜀書社、一九八八年）参照。
- (8) 文史知識編輯部編『古代禮制風俗漫談』四（中華書局、一九九二年）所収。
- (9) 『初學記』卷二五、器物部・扇の條。

- (10) ただし、周一平・沈茶英編著『歲時紀時辭典』(湖南出版社、一九九一年)は、盛夏を「指農曆六月」とする。
- (11) 趙和平『敦煌寫本書儀研究』所收。
- (12) 『玉臺新詠』卷一には「怨詩」と題して「昔漢成帝班婕妤失寵、供養長信宮。乃作賦自傷、并爲怨詩一首」の序をもち、「皎潔」を「鮮潔」に作る。また『藝文類聚』卷六九、扇の條には、「扇詩」と題する。
- (13) これは、門の字を二つに割ったような形(扇面は臺形)で、一方に柄がつく。偏扇は、左右に動かしてあおぐ團扇とは異なり、手の中でくるくる回すもの。
- (14) 塙書房、一九七九年、一三〇二頁。
- (15) 山本健吉監修『大歳時記』第一卷(句歌春夏)(集英社、一九八九年)に收める「扇」の條(上野理執筆)に據る。
- (16) 王守稼「漫話折扇與中日文化交流」『文物』一九八二年第七期) 參照。
- (17) 刀江書院、一九五〇年。
- (18) 宋の郭若虛『圖畫見聞誌』卷六、近事、高麗國の條に、「彼使人每至中國、或用摺疊扇爲私觀物。……謂之倭扇、本出於倭國也」(原注、倭國、乃日本國也)とある。
- (19) 曾棗莊・馬德富校點『樂城集』卷十三(上海古籍出版社、一九八七年) 所收。
- (20) 未詳。孔凡禮點校『蘇軾詩集』卷二九に收める「和張耒高麗松扇」には見えない。
- 『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(植木)
- (21) 楊蔭深編著『事物掌故叢談』器用雜物・扇拂(上海書店、一九八六年影印)や、周一良『魏晉南北朝札記』「腰扇」(『南齊書』札記) 參照。
- (22) 拙稿『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(『中國詩文論叢』十二集、一九九三年)に收める一七七番の「翠扇」の條 參照。
- (23) 『廣韻』上聲・四十四有韻の條に收める「搨」の注に「搨扇別名」とある。
- (24) 東京美術・人民中國雜誌社共同編集『中國文化のルーツ』下卷(東京美術、一九九〇年) 所收。
- (25) 『通典』卷二一、中書舍人の條。
- (26) 同朋舎、一九八六年。
- (27) 吳澄『月令七十二候集解』に、立春・立秋の立を、「建り始まるなり」の意とする。建は至の意。
- (28) 平岡武夫『唐代之曆』による推定。
- (29) 仁井田陞『唐令拾遺』假寧令の條や、池田溫編『中國禮法と日本律令制』(東方書店、一九九二年)に收める丸山裕美子「假寧令と節日—古代社會の習俗と文化—」 參照。
- (30) 『中國詩文論叢』六集、一九八七年所收。
- (31) 夏承焘『月輪山詞論集』(中華書局、一九七九年) 所收。
- (32) 本年(長慶元年)の二月、新昌坊の東北隅(隅は坊の四分の一)の東端の一角に初めて購入した屋敷。廣義の樂遊原のほとりにあり、その「新昌新居書事四十韻」詩(卷19)に

中國詩文論叢 第十五集

よれば、狐や兔も出沒した。なお拙稿『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四(『中國詩文論叢』十集、一九九一年)の一番参照。

(33) 農業出版社、一九八二年、四九頁。

(34) 伊藤正義・黒田彰編著『和漢朗詠集古注釋集成』第二卷(大學堂書店、一九九四年)下に收める廣島大學本。

(35) 『學林』二一號、一九九四年所收。

(36) 高島俊男「律詩の『子類特殊形式』について」(『東方學』四十輯、一九七〇年)の注4による。

(37) 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成 唐詩』第十輯(汲古書院刊)所收。神谷重繩・加藤秉彜校。

(38) 羅竹風主編『漢語大詞典』11には、「①會計、計算、②計慮、商量」とあり(二十頁)、諸橋『大漢和辭典』(修訂版)卷十には、「①はかりあはせる。數へはかる。②思ひはかる。

又、其のこと。思慮。③相談する」とある(二八七頁)。

(39) 角川書店、一九九四年。

(40) 巴蜀書社、一九九〇年、二十頁。

(41) 中國書店、一九九五年。

(42) 山本北山『詩用虚字』に方千の用例をあげて、「シメク、ル」と譯す。

(43) 『國文學 解釋と鑑賞』五五卷十號、一九九〇年所收。

(44) 鈴木學術財團、一九六九年。

(45) 花山文藝出版社、一九九二年。

(46) 佐久注は「會計に同じ、計算すること」とし、西村富美子

『白樂天』も同じ。岡村繁『白氏文集』四(竹村則行執筆)

の注には、「會計に同じ。計算する、按配する」とある。終

りの「按配する」は、穩當な解釋であろう。柿村『要解』の

「計會は一處に會合すること」は、妥當ではない。

(47) 川口『文庫』本の譯「立秋の今日という日に、天の季節と

我が身の季節が一時に秋となるよう、いったいだれがとりは

からつたのでしょうか」とも適譯である。

(48) 中華書局、一九九〇年。

(49) 拙稿『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂一(『中國詩文論叢』七集、一九八八年)参照。

(50) 郵政民主編『古書未釋詞語會釋』(江西教育出版社、一九九一年)も、白詩「府西池」を「通知、通報」の意とする。

(51) 中州古籍出版社、一九九三年。

(52) 『李太白全集』卷二。

〈論稿募集のお知らせ〉

『中國詩文論叢』第十六集の論稿を以下の要領で

募集致します。

應募資格：本會會員の方に限ります。

應募締切：一九九七年七月三十一日必着。

提出先：東京都新宿區戸山1の24の1
早大文學部松浦研究室宛